

女子大学生における学校適応感尺度の作成

Construction of the School Adjustment Scale for Female University Students

山口豊一・松寄くみ子

YAMAGUCHI Toyokazu, MATSUZAKI Kumiko

要 旨

本研究の目的は、女子大学生の学校適応感を測定するための尺度を作成し信頼性と妥当性を検討することである。女子大学生 280 名を対象に質問紙調査を実施し、因子分析による尺度の検討を行った。その結果、第 I 因子「健康」6 項目、第 II 因子「社会」5 項目、第 III 因子「進路」4 項目、第 IV 因子「学習」3 項目、第 V 因子「先生との関係」2 項目の 5 因子から構成されていることが分かった。よって、以上 5 因子 20 項目を以て学校適応感尺度（女子大学生版）とした。

学校適応感尺度（女子大学生版）の信頼性を検討するため、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、各下位尺度の α 係数は、「健康」.849、「社会」.749、「進路」.822、「学習」.791、「先生との関係」.846 であった。以上より、一定の内的一貫性が確認された。

次に、妥当性を検討するため、学校適応感尺度（女子大学生版）と生活充実感尺度、およびアセス（生活満足感、学習適応感）とのピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、学校適応感尺度（女子大学生版）と生活充実感尺度およびアセスの下位尺度（「生活満足感」、「学習適応感」）の間に有意な相関関係が見られ、一定の基準関連妥当性が確認された。

キーワード：女子大学生、学校適応感、信頼性、妥当性

Keywords : Female University Student, School Adjustment, Reliability, Validity

I はじめに

近年、学校における不登校やいじめなどの問題が大きく注目されている。文部科学省（2017）によると、平成 27 年度の小学校の不登校人数は 27,583 人、中学校は 98,408 人、高等学校は 49,563 人であると報告されている。いじめの認知件数においても小学校は 151,692 件、中学校は 59,502 件、高等学校は 12,664 件と報告されている。このように不登校やいじめなどの問題が深刻化している中で、その予防的対応に関するニーズは非常に高くなっていることが指摘されている（山口・下村・高

橋・奥田・松寄, 2016)。そして, これらの問題行動に対して生徒が学校環境に適応感を持つか否かが, 予防の上で重要とされている(大重・渡辺, 2008)。

さらに, 大学生における学生生活上の問題として, 文部科学省(2012)は, 平成 24 年度の年間中途退学率が 2.65%と, 平成 19 年度の 2.41%と比較して増加していることを示している。加えて, 「学校生活不適応」を理由に中途退学している人が, 中途退学者全体の 4.4%いることが示されている。その背景として, 中村・松田(2012)は, 心理的要因としての大学生の適応力の低下があると指摘している。

しかし, 大学生を対象とした学校適応感に関する研究は多くない。また, 学校適応感尺度については, 小・中・高等学校用は作成されている(山口ら, 2016; 池田・日高・松沼・小杉, 2012)一方で, 大学生用の尺度は作成されていない。

したがって, 大学生用の学校適応感尺度の作成は, 大学生の学校適応感を測定し, 学生生活上の問題に対し予防的対応をするためにも必要であるといえる。そこで, 本研究では, 大学生版学校適応感尺度作成の先駆けとなる, 学校適応感尺度(女子大学生版)の作成を目的とする。

II 方法

1. 調査時期

2017 年 5 月～7 月に実施した。

2. 調査協力者

国内の私立大学 2 校に在籍する女子大学生 280 名であった。

3. 調査方法

無記名による質問紙調査を大学の講義内で実施した。

調査対象者には, 研究者より本研究の趣旨と同意について説明を行い, 回答をもって調査協力依頼への同意とみなすものとした。

4. 質問項目

(1) フェイスシート

学年, 性別, 学科, コースについて, それぞれ尋ねた。コースについては, 所属コースがある場合のみの回答であった。

(2) 学校適応感尺度(女子大学生版) 暫定項目

山口ら（2016）の小学生版学校適応感尺度を参考に、心理学の研究者 4 名で検討を行い、女子大学生の学校適応感に関する 25 項目を作成した（表 1）。そして、「1：まったくあてはまらない」、「2：あまりあてはまらない」、「3：ややあてはまる」、「4：とてもあてはまる」の 4 件法で回答を求めた。

表 1 学校適応感尺度（女子大学生版）暫定項目

1	先生に対して不満があるとき
2	教科の先生の接し方や教え方に不満があるとき
3	自分の性格や体格で気になることがあるとき
4	部活動で上手くいかないとき
5	異性との交際が上手くいかないとき
6	友だちとのつき合いが上手くいかなかったり、友だちがいないとき
7	自分の家庭のことで心配なとき
8	自分に合った勉強方法がわからないとき
9	授業の内容がわからないとき
10	何となく意欲がわかず、勉強する気になれないとき
11	勉強しても成績が伸びないとき
12	成績や勉強のことで親の期待が重荷のとき
13	将来の自分の進路について心配があるとき
14	進路や就職のことについて真剣に取り組めないとき
15	進路選択において、自分の希望が親や先生の意見と一致しないとき
16	自分の適性がわからないとき
17	学校に行くのがつらくなったり、生きたくなくなったりしたとき
18	学校あるいは学級になじめないとき
19	一日中、眠かったり、身体がだるくなったりしたとき
20	頭痛・腹痛などが起こるとき
21	疲れを感じてもしっかりと休めないとき
22	睡眠時間が十分に取れないとき
23	身体の具合を正確に言葉で伝えられないとき
24	身体が必要としている栄養をバランスよく取れないとき
25	具体的な進路を選択できないとき

(3) 生活充実感尺度（高橋・青木，2010）

生活充実感尺度は、児童期から大学生までの包括的な適応感を測定できる単一因子構造による、全 6 項目の尺度である。学校適応感尺度（女子大学生版）との基準関連妥当性を検証する尺度として用いた。「1：まったく当てはまらない」、「2：あまり当てはまらない」、「3：だいたい当てはまる」、

「4：ぴったり当てはまる」の 4 件法で回答を求めた。

(4) 生活満足感と学習適応感を測定する尺度

学校環境適応感尺度「アセス」(ASSESS: Adaptation Scale for School Environments on Six Spheres: 以下, アセス)は, 第 I 因子「生活満足感」(5 項目), 第 II 因子「教師サポート」(5 項目), 第 III 因子「友人サポート」(5 項目), 第 IV 因子「非侵害的關係」(5 項目), 第 V 因子「向社会的スキル」(5 項目), 第 VI 因子「学習的適応」(5 項目)の 5 因子, 計 30 項目からなる尺度である(米沢, 2011)。このうち, 第 I 因子である「生活満足感」と第 VI 因子である「学習的適応」(5 項目)の計 10 項目を, 学校適応感尺度(女子大学生版)との基準関連妥当性を検証する下位尺度として用いた。「1: あてはまる」, 「2: ややあてはまる」, 「3: どちらでもない」, 「4: ややあてはまらない」, 「5: あてはまらない」の 5 件法で回答を求めた。

5. 倫理的配慮

質問紙は無記名での記入とし, データは統計的処理を施した集団のデータとして公表する。質問紙には, 研究以外の目的では使用しないこと, 個人が特定されないこと等が説明されている。また, 質問紙への回答をもって調査協力への同意とみなした。

6. 分析方法

- 1) 学校適応感尺度(女子大学生版)暫定項目の天井効果・フロア効果の検討を行い, その結果抽出された項目について因子分析を行い, 因子構造を検討した。
- 2) 学校適応感尺度(女子大学生版)の内部一貫性による信頼性を検討するため, Cronbach の α 係数を算出した。
- 3) 学校適応感尺度(女子大学生版)の基準関連妥当性を検討するため, 学校適応感尺度(女子大学生版)と, 生活充実感尺度およびアセス(生活満足感, 学習適応感)とのピアソンの積率相関係数を算出した。
- 4) 分析には, 統計解析ソフト IBM SPSS Statistics 20 を使用した。

III 分析過程と結果

1. 分析対象者

調査対象者の回答の内, 空欄や不備のなかった 234 名のデータを分析対象とした(有効回答率 83.57%)。

2. 学校適応感尺度（女子大学生版）暫定項目の因子分析

学校適応感尺度（女子大学生版）暫定項目の 25 項目に対し、天井効果・フロア効果の検討を行った。その結果、天井効果もフロア効果も見られなかったため、全 25 項目を分析対象とした。

次に、全 25 項目について最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の落差や、因子解釈の可能性を考慮し、最終的に 5 因子構造が妥当であると考えられた。そこで、再度 5 因子を仮定して因子分析を行った。その結果、因子負荷量が.35 以下であった、「3. 自分の性格や体格で気になることがあるとき」、「11. 勉強しても成績が伸びないとき」、「12. 成績や勉強のことで親の期待が重荷のとき」、「15. 進路選択において、自分の希望が親や先生の意見と一致しないとき」、「17. 学校に行くのがつらくなったり、行きたくなくなったりしたとき」の 5 項目を分析から除外し、再度因子分析を行った。その結果、最終的に 20 項目となった（表 2）。

表 2 学校適応感尺度（女子大学生版）の因子分析

質問項目	I	II	III	IV	V	
I: 健康 (α = .849)						
21 疲れを感じてもしっかりと休めないとき	.955	-.010	-.006	-.153	-.017	
22 睡眠時間が十分に取れないとき	.832	.029	-.029	-.023	-.044	
20 頭痛・腹痛などが起こるとき	.595	.113	-.002	-.050	.045	
19 一日中、眠かったり、身体がだるくなったりしたとき	.570	.067	-.058	.168	-.028	
24 身体が必要としている栄養をバランスよく取れないとき	.502	-.105	.088	.213	.066	
23 身体の具合を正確に言葉で伝えられないとき	.457	.074	.034	.182	.018	
II: 社会 (α = .749)						
6 友だちとのつき合いが上手くいかなかったり、友だちがいないとき	-.019	.892	-.014	.027	-.027	
7 自分の家庭のことで心配なとき	-.107	.540	.033	.164	.041	
5 異性との交際が上手くいかないとき	.071	.497	.023	-.138	-.036	
4 部活動で上手くいかないとき	.113	.488	-.052	.061	-.044	
18 学校あるいは学級になじめないとき	.191	.452	.163	-.080	.090	
III: 進路 (α = .822)						
13 将来の自分の進路について心配があるとき	-.032	.028	.813	-.103	.027	
16 自分の適性がわからないとき	.026	.034	.725	-.034	-.057	
25 具体的な進路を選択できないとき	-.112	.030	.689	.175	-.016	
14 進路や就職のことについて真剣に取り組めないとき	.134	-.038	.680	.013	.012	
IV: 学習 (α = .791)						
9 授業の内容がわからないとき	.054	.076	-.099	.823	.041	
8 自分に合った勉強方法がわからないとき	-.122	.082	.060	.789	.001	
10 何となく意欲がわかず、勉強する気になれないとき	.275	-.220	.041	.599	-.071	
V: 先生との関係 (α = .846)						
2 教科の先生の接し方や教え方に不満があるとき	.047	-.066	-.003	-.005	.984	
1 先生に対して不満があるとき	-.054	.042	-.019	.006	.757	
全体: (α = .882)						
	因子寄与率					54.246%
	因子間相関					
I	—	-.361	.527	.489	.182	
II		—	.587	.281	.202	
III			—	.444	.181	
IV				—	.327	
V					—	

因子抽出法 : 最尤法 回転法 : プロマックス回転

項目数: 20項目

因子分析削除項目: 3,11,12,15,17 計5項目

第Ⅰ因子は、「21. 疲れを感じてもしっかり休めないとき」、「22. 睡眠時間が十分に取れないとき」など、健康面に関する6項目で構成されたため、「健康」因子と命名した。

第Ⅱ因子は、「6. 友だちとのつき合いが上手くいかなかったり、友だちがいないとき」、「7. 自分の家庭のことで心配なとき」など、社会生活に関する5項目で構成されたため、「社会」因子と命名した。

第Ⅲ因子は、「13. 将来の自分の進路について心配があるとき」、「16. 自分の適性がわからないとき」など、進路に関する4項目で構成されたため、「進路」因子と命名した。

第Ⅳ因子は、「9. 授業の内容がわからないとき」、「8. 自分に合った勉強方法がわからないとき」など、学習面に関する3項目で構成されたため、「学習」因子と命名した。

第Ⅴ因子は、「2. 教科の先生の接し方や教え方に不満があるとき」、「1. 先生に対して不満があるとき」という、先生との関係性に関する2項目で構成されたため、「先生との関係」因子と命名した。

各因子間の相関は、「健康」と「進路」において $r = .527$ 、「健康」と「学習」において $r = .489$ 、「社会」と「進路」において $r = .587$ 、「進路」と「学習」において $r = .444$ であり、比較的強い正の相関が見られた(表2)。また、「社会」と「学習」において $r = .281$ 、「社会」と「先生との関係」において $r = .202$ 、「学習」と「先生との関係」において $r = .327$ であり、弱い正の相関が見られた。そして、「健康」と「社会」においては $r = -.361$ と、弱い負の相関が見られた。また、「健康」と「先生との関係」において $r = .182$ 、「進路」と「先生との関係」において $r = .181$ であり、ほとんど相関が見られなかった。

以上より、この20項目をもって「学校適応感尺度(女子大学生版)」とした。

3. 信頼性の検討

内的一貫性による信頼性を検討するために、各因子の Cronbach の α 係数を算出した(表2)。第Ⅰ因子「健康」は6項目で $\alpha = .849$ 、第Ⅱ因子「社会」は5項目で $\alpha = .749$ 、第Ⅲ因子「進路」は4項目で $\alpha = .822$ 、第Ⅳ因子「学習」は3項目で $\alpha = .791$ 、第Ⅴ因子「先生との関係」は2項目で $\alpha = .846$ であった。また、学校適応感尺度(女子大学生版)全体では、20項目で $\alpha = .882$ であった。

4. 基準関連妥当性の検討

基準関連妥当性の検討のために、学校適応感尺度(女子大学生版)と生活充実感尺度、そしてアセス(生活満足感、学習適応感)とのピアソンの相関係数を算出した(表3)。その結果、学校適応感尺度(女子大学生版)と生活充実感尺度との間に、 $r = -.158$ ($p < .05$)、下位尺度生活満足感との間に、 $r = -.256$ ($p < .01$)、下位尺度学習適応感との間に、 $r = -.264$ ($p < .01$) の有意な負の弱い相関関係が見られた。

表 3 学校適応感尺度（女子大学生版）の平均値と標準偏差，および各尺度間との相関

N=234	
学校適応感	
<i>M</i>	2.752
<i>SD</i>	.497
生活充実感	-.158 *
生活満足感	-.256 **
学習適応感	-.264 **

* $p < .05$ ** $p < .01$

IV 考察

1. 学校適応感尺度（女子大学生版）の作成に関して

(1) 学校適応感尺度（女子大学生版）暫定項目の因子分析

本研究の目的は、女子大学生の学校適応感を測定する尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することであった。本尺度の作成にあたり、山口ら（2016）の小学生版学校適応感尺度を参考に、内容を女子大学生向けに改め、女子大学生の学校適応感に関する 25 項目を設定した。その結果、最尤法・プロマックス回転による因子分析によって「健康」、「社会」、「進路」、「学習」、「先生との関係」の 5 因子 20 項目が抽出された。これらは、山口ら（2016）が作成した小学生版学校適応感尺度とほぼ同様の因子から構成されている。なお、小学生版学校適応感尺度では「心理・社会」因子となっているが、本研究では、自分とのつきあいに関する心理面の項目は除外され、他者とのつきあいに関する社会面の項目のみが「社会」因子として抽出された。よって、大学生は小学生と比較して心理面が重視されていないことが示された。また、「学習」および「進路」因子については、小学生版学校適応感尺度では「学習・進路」因子と一つに統合されていた。つまり、大学生においては小学生とは異なり、学習面と進路面の問題は区別されていることが示唆された。

(2) 信頼性の検討

本研究で算出された Cronbach の信頼性係数 α は、第 II 因子「社会」および第 IV 因子「学習」の α 係数がやや低い値となっているが、それ以外の下位因子および尺度全体の α 係数は .80 以上となっており、ほぼ満足できる水準の信頼性を確認できた。したがって、学校適応感尺度（女子大学生版）の十分な内的一貫性が示されたといえる。

(3) 基準関連妥当性の検討

学校適応感尺度（女子大学生版）および生活充実感尺度とアセス（生活満足感，学習適応感）の

ピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、それぞれに弱い負の相関関係が認められた。学校適応感尺度（女子大学生版）が、1に近いほど適応的であるとみなされる回答の構成になっているのに対し、生活充実感尺度とアセス（生活満足度、学習適応感）は、4または5に近いほど適応的とする回答の構成になっている。したがって、学校適応感尺度（女子大学生版）に一定の基準関連妥当性があるといえる。

2. 今後の課題

以上の結果から、「学校適応感尺度（女子大学生版）」の信頼性、基準関連妥当性は確認された。しかし、本研究に加えて更に検討する必要があることが以下のようにあげられる。第一に、基準関連妥当性については、「学校適応感尺度（女子大学生版）」とそれぞれの尺度の間に十分といえる相関関係が認められなかった。第二に、項目数の少ない下位尺度（「学習」、「先生との関係」）もみられた。第三に、本研究の調査協力者が280名と少なかった。したがって、今後は調査協力者の数を増やし、下位尺度についての更なる検討を重ね、信頼性と妥当性を確認していく必要がある。

本研究では、尺度作成のみに留まり、女子大学生の学校適応感を検討するまでに至らなかった。今後は学校適応感を促進したり阻害したりする要因についても検討することが課題である。また、本研究で作成された学校適応感尺度は、女子大学生への測定に限られているため、男子大学生や大学生全体の学校適応感を測定できる尺度の作成が望まれる。

<謝辞>

本研究にご協力いただいた先生方に感謝致します。

参考・引用文献

- 池田正博・日高美咲・松沼風子・小杉考司（2012）. 新学校適応感尺度 FIT 高校生版の開発, 日本教育心理学会総会発表論文集, **54**, 198.
- 文部科学省（2012）. 学生の中途退学や休学等の状況について, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/_icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf 2017年10月14日閲覧.
- 文部科学省（2017）. 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査, <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/NewList.do?tid=000001016708> 2017年10月14日閲覧.
- 中村真・松田英子（2012）. 大学生の学校適応に影響する要因の検討—大学不適応, 大学満足, 就学意欲に着目して—, 江戸川大学紀要, **23**, 151-160.
- 大重啓・渡辺弥生（2008）. 親の養育態度が子どもの友人関係および学校適応感に及ぼす影響, 日本教育心理学会総会発表論文, **50**, 333.
- 高橋智子・青木多寿子（2010）. 児童期からの適応感を測定できる生活充実感尺度の開発, 広島大学大学院教育学研究科紀要, **59**, 111-118.
- 山口豊一・下村麻衣・高橋美久・奥田奈津子・松寄くみ子（2016）. 小学生版学校適応感尺度の作成, 跡見学園女子大学文学部紀要, **51**, 111-118.
- 米沢崇（2011）. アセスの理論的背景と開発手順 栗原慎二・井上弥（編著）Excel 2010 対応版 アセス（学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト）の使い方・活かし方 CD-ROM 付き！自分のパソコンで結果がすぐわかる ほんの森出版, 65-78.